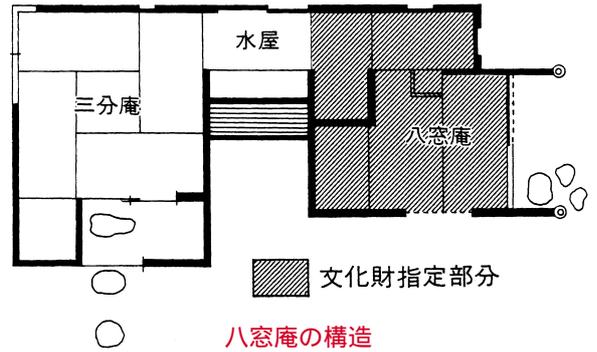


八窓庵の魅力

八窓庵は、二畳台目（三畳に四分の一畳分足りない広さ）の茶室で、合計八個の窓を備え、席名もこれに基づいている。八つの窓が狭い空間を広々と立体的なものにしており、窓の配置にも工夫がある。茶席の二枚の畳にそれぞれ四つの窓が配され、光が集中するようにっており、その「照明」の効果は絶妙といわれている。

昭和十一年に国宝として指定され、法改正のため二十五年にあらためて重要文化財に指定された。現在、本席とながっている水屋ともう一つの茶室は、持田氏が八窓庵を買い取った際に付設したものである。

茶道では、茶室はもちろん、そこへ至るまでの通路や露地（庭）も重視されている。露地は、茶の湯の世界を日常的な世界と隔離する結果だと考えられ、茶聖千利休も「茶の湯は露地口を入る時から始まる」と語ったという。八窓庵の露地は、遠州の系譜に連なる遠州流茶道宗家十二世の小堀宗慶氏が六十二年に作庭し、札



幌市に寄贈したものであり、遠州と宗慶氏の時を超えた合作を楽しむことができる。
八窓庵の開館時間 午前9時～午後4時（5月の連休明け～10月下旬）



地下鉄 南北線「中島公園駅」下車
 市電 「中島公園通」下車
 市バス 山鼻環状線「中島公園駅前」、「中島公園入口」下車

八窓庵を造った

小堀遠州ものがたり

小堀遠州こと、小堀正一は天正七年（一五七九）に近江国坂田郡小堀村（滋賀県長浜市小堀町）で生まれた。父親の正次は、北近江の太守浅井長政の家臣であったが、長政が滅びた後、豊臣秀吉の弟秀長の家老となった。

遠州は少年時代を秀長の居城があった大和国郡山（奈良県大和郡山市）で過ごす。早くから書道や和歌、茶道などを学んでいたが、特に茶道において非凡であったという。遠州が九歳の時のエピソードが残っている。秀吉が郡山城を訪れることとなり、秀長は秀吉の前で粗相をしないよう、千利休を呼んで茶の湯の作法を練習していた。遠州はその様子を遠くから眺め、利休の姿を見ることができたという。それは利休と遠州という後世に名を残した大茶人同士の一瞬の「出会い」であった。三年後、利休は秀吉の怒りを買って自刃する。郡山城での利休の姿は、遠州の胸に焼き付けられたに違いない。その後、茶道への情熱が増したのか、十五歳ころには当代随一の巨匠古田織部に師事し、

茶の湯の奥義を極めていった。一方、父の正次は大和豊臣秀吉の直参となるが、今度は秀吉が死に、天下が再び乱れ始めると、慶長五年（一六〇〇）の関が原の役で東軍にくみし、その功により備中国松山（岡山県高梁市）の城主を拝命することとなった。正次の死により、遠州が家督を継いだのは慶長九年（一六〇四）、二十五歳の時である。優れた建築家でもあった遠州がその才能を発揮し始めるのは、これより二年後の後陽成院御所の作事奉行（幕府関係の建物の造営・修繕などを統括する職）の一員に加えられるからだ。以後、駿府城や名古屋城の作事奉行にも任じられ、駿府城の完成の際には従五位下遠江守を授かり、それが遠州と呼称されるゆえんとなった。

元和九年（一六三三）、四十四歳となった遠州は生涯の職となる伏見奉行につき、畿内の監督者となった。また作事について幕府はさらに遠州を重用し始め、伏見城や大坂城などの重要な作事が遠州を中心に行われていった。

道においても円熟期に入った遠州は、織部なき後の天下第一の巨匠と自他共に認める存在となり、茶の湯指南役として將軍の信任も厚かった。しかし、すべてが順調ではなく、危機もあった。理由は不明だが、遠州が公金一万両を横領し、それが人に知られることとなったのだ。しかし、酒井忠勝をはじめ、遠州に批判的であった細川忠興までが、遠州を失うことを惜しみ、公金返済の資金を提供したという。將軍の茶道指南役として、また各地での建築、造園のため東奔西走し続けた遠州であったが、晩年は茶事ざんまいに過ごし、正保四年（一六四七）に伏見奉行屋敷で没した。享年六十九歳であった。しかし、遠州の名は遠州流茶道の祖として、また庭園史上不朽の存在として、現在まで語り継がれている。

元和九年（一六三三）、四十四歳となった遠州は生涯の職となる伏見奉行につき、畿内の監督者となった。また作事について幕府はさらに遠州を重用し始め、伏見城や大坂城などの重要な作事が遠州を中心に行われていった。

元和九年（一六三三）、四十四歳となった遠州は生涯の職となる伏見奉行につき、畿内の監督者となった。また作事について幕府はさらに遠州を重用し始め、伏見城や大坂城などの重要な作事が遠州を中心に行われていった。



小堀遠州像 - 大徳寺孤篷庵所蔵